

建造物

長尾天満宮本殿及び透塀の調査について

千木良 礼子

1 概要

長尾天満宮は京都市伏見区醍醐伽藍町に位置する醍醐寺の鎮守社の一つである。天慶3年(940)の創建と伝わる(『山城名勝志』)。享和元年(1801)に荒廃していた社殿が再建されたが、文政2年(1819)8月10日に火災にあい、同4年(1821)6月に再建されたという¹⁾。本殿には中央に菅原道真、左右に素盞鳴尊(元清瀧大権現)と大己貴命(元勝馬大明神)²⁾が祀られている。平成27年度に“京都を彩る建物や庭園”に選定され、その2年後には同制度の認定物件となった。

2 建物の形式

建物は三間社流造で、元は檜皮葺であったところ昭和55年(1980)に銅板葺にした(図1)。本殿は亀腹の上に建つ。正面側面の三方に高欄と切目縁を廻し、脇障子を

斜め後方に開いて立てる。正面に階5級、擬宝珠付高欄を設ける。身舎柱は円柱で、切目長押、内法長押、頭貫で固め、柱上に出三斗を置く。正面の中備の墓股(図2)は内部を格狭間のような形とし、眠連子を入れる。妻は二重虹梁で(図3)、東西に蓑亀と鶴の墓股(図4・5)、笈形付大瓶束を立てる。破風に鱗付鎗懸魚を飾る。両側面と背面の頭貫木鼻は獅子の丸彫り(図6)、斗拱の木鼻は龍を彫る(図7)。

向拝は4組の海老虹梁で繋ぎ(図8)、浜



図2 正面の墓股



図1 本殿外観



図3 東面の二重虹梁



図4 東面 臺股 (菟亀)



図8 海老虹梁



図5 西面 臺股 (鶴)



図9 内法長押 (五色の石畳紋様)



図6 西面後方の木鼻 (獅子)



図10 正面頭貫 (龍)



図7 西面中央の木鼻 (龍)



図11 脇障子

床、高欄付き浜縁とする。軒は二軒繁垂木。柱間装置は、正面に小脇壁を設け弊軸付両外開板戸、両側面と背面は板壁とし、横板張の上に角釘及び丸釘で縦板を張る。内部は内外陣境に両外開板戸を吊り、3室とする。内陣天井は棹縁天井とする。

3 彩色

彩色は軸部を丹塗りとし、柱上部、内法長押、繫虹梁、組物、墓股などに極彩色を施す。板壁、軒裏などは胡粉塗りとする。身舎桁は菱花格子、内法長押は五色の石畳紋様が描かれる(図9)。また、正面頭貫には3体の龍が描かれる。左右はそれぞれ中央を向き、中央の龍は右端(東端)に尾があり、左端(西端)で首をひねって右を向く(図10)。類例には、醍醐寺清瀧宮(重要文化財・永正14年<1517>)や醍醐寺領内であった日野法界寺の鎮守社萱尾神社(市指定有形文化財・慶安5年<1652>)が挙げられる。いずれも極彩色の本殿で、前者は三間社流造で、左右2間に向拝虹梁が付き、それぞれに龍が中央を向いて描かれる。後者は一間社流造で、向拝虹梁に1体の龍が描かれる。

4 彫刻

彫刻は、向拝頭貫両端に猿、墓股は東に鉄拐仙人と松、中央に豊干禪師と虎と竹、西に蝦蟇仙人と蛙墓と梅が輪郭からはみ出して彫られる。脇障子は東に鯉の滝登り、西に獅子の子落しを題材にした透かし彫りがはめられる(図11)。脇障子が斜めに立

つのは見やすい効果があるとされ、類例には大笹原神社(国宝・応永21年<1414>・滋賀県野洲市)、稲粒神社(府登録・寛政11年<1799>・福知山市・大工播州三木室田儀右衛門・彫物丹波柏原中井丈五郎・久須善兵衛)、生野神社(弘化5年<1848>・福知山市・彫物当国柏原中井清次郎正用)、大滝神社(重文・天保14年<1843>・福井県越前市・大工大久保官左衛門)などがあり、いずれも装飾に富んでいる。福知山の2件は播州大工の影響が指摘されている(日向1989)。

5 資料

棟札は文政4年造営に関するものが3枚ある。そのうちの1枚目の表には、「文政四年五月四日」に醍醐村惣百姓の五穀豊穰等を祈願し、「御門室(醍醐寺座主)」のもと、三宝院の家司として坊官である平井法橋宣重(天明3年<1783>生)、大溪法橋豪正(寛政3年<1791>—天保5年<1834>)、諸太夫の山田正六位下爲美(宝暦3年<1753>生)、また「御造営御用掛」として寺侍である櫻井忠貞(寛政元年<1789>生)と山田爲貴(爲美の子)の名が記され、彼らが工事費用の管理や大工との契約などの采配をふるったと思われる³⁾。

棟札裏には産子中として、大年寄と納庄屋を兼務する下村良輔寅亮、大年寄である金井吉兵衛房常、そして十二町(御陵町、赤間町、新町、大谷町、小坂町、開出町、落東町、落西町、落保町、泉町、南里町、菩提町)の年寄が記されている⁴⁾。

2枚目の棟札には、鉦初、地鎮祭、下遷

表1 長尾天満宮普請の経緯

日時	内容	典拠
文政2年8月10日	焼失	醍醐日記, 内陣箱書
文政3年9月5日	釘初	醍醐日記, 棟札
文政4年3月4日	地祭	棟札
文政4年4月18日	天満宮小社両側共一棟二相煩候二付雖承事江と御覚	醍醐日記
文政4年5月4日	上棟	醍醐日記, 棟札
文政4年5月29日	明朔日 天満宮下遷宮仰密厳院候_____	醍醐日記
文政4年6月朔日	天満宮下遷座二付 座主参詣之事	醍醐日記, 棟札
文政4年6月7日	天満宮上遷宮之事 遷宮師密厳院 座主御参詣之事	醍醐日記, 棟札

※下線部は不鮮明

座, 上遷座の日付が記載され, 醍醐寺座主じょうこう上綱によって国土豊饒が祈願されている。遷座師は密厳院演乘, 大工は泉町の平松源兵衛資富と平松定次郎蕃昌, 大工下役に播州加東郡垂井庄北嵩村(現兵庫県小野市垂井町)田中善兵衛藤原清平とその弟子田中惣兵衛と記される。これら棟札と内陣内に納められている箱の扉裏書き, 及び「醍醐日記」によって, 文政2年8月に焼失してから文政4年6月の遷宮までの普請の様子がわかる(表1)。

福知山市の2件は, 播州大工の影響が指摘されており, 長尾天満宮の棟札にも播州大工の記載があることから, 同じ影響がうかがえる。

6 透塀

透塀は本殿手前に東西に立つ。西透塀の東端部の添え柱(石柱)に「辛文政四年/巳四月/取次青山源右衛門」とあり, 本殿と同時期に建てられたことがわかる。東透塀には西端から水辺の花鳥と亀, 水面下へ潜る鴨カと枇杷, 東端に水辺に立つ水鳥と

紅葉カが彫られる。西透塀には東端から松竹梅がそれぞれの柱間に彫られ, それに合わせて東端から鶴, 中央に雉, 西端に2羽の尾長鳥が丁寧に彫られる。年代は本殿と同じであるが, 松竹梅や鶴の彫刻を見ると, 本殿とは別の彫師であると思われる。

7 石灯籠

透塀手前には3基の石灯籠が東西一列に並ぶ。参道両側には「清香院」が貞応2年(1653)と同3年に, やや西には「清水数馬勝正」が寛文元年(1661)に寄進したものである。「清香院(清高院)」と「清水数馬勝正」の父である清水道是は醍醐寺理性院に仕えていた(吉兼2018)。また, 「清水数馬勝正」寄進の石灯籠は, 寛文元年のもので醍醐寺清瀧宮の正面にも立つ。以上のことから, これら石灯籠3基は醍醐寺との関係を示す上で貴重である。

8 まとめ

京都市内の流造本殿は保守的で装飾彫刻

が少ないのが一般的であるが、長尾天満宮本殿及び透塀は全体にわたって華麗な装飾を施し、市内有数の装飾に富んだ建物と言える。そこには醍醐寺の影響が見られつつ、近世に活躍する播州大工の影響をも受けていることがうかがえ、建築活動を知る上でも貴重な遺構である。

註

- 1) 内陣に納められている箱の扉裏の墨書、及び「醍醐日記」(「山田親英文書」京都市歴史資料館撮影)による。なお、『宇治郡名勝誌』(明治31年刊行)には「文化二年八月十日祝融ノ災ニ罹リ」とあるが、文政二年の誤字と思われる。
- 2) 勝間大明神は地藏菩薩の垂迹神であるという(醍醐寺文化財研究所1991)。
- 3) 「平井(政)家文書」「大溪(晃)家文書」「山田親英文書」京都市歴史資料館撮影。生没は(正宗1938)による。
- 4) 赤間町, 新町, 落保町, 泉(和泉)町, 南里町は現在も地名として残る。

参考文献

- 正宗敦夫1938『地下家伝』日本古典全集刊行会
日向進1989「丹波柏原の彫物師中井氏とその営業形態—近世丹波・丹後に置ける建築界の動向」『日本建築学会計画系論文報告集第396号』
醍醐寺文化財研究所1991『醍醐新要録』巻第9 p504
吉兼千陽2018「醍醐寺・長尾天満宮に所在する近世石燈籠の研究」『文化遺産研究 創刊号』龍谷大学文化遺産学研究会

棟札及び墨書の翻刻については30～33頁に一括して掲載した。

図面, 棟札画像, 及び一部写真はNPO法人古材文化の会よりご提供いただいた。棟札翻刻は京都市歴史資料館監修のもと行った。また長尾天満宮には現地調査にご協力いただいた。末筆ながら記して深甚の謝意を表します。

ちぎられいこ
千木良礼子 (文化財保護課 文化財保護技師 (建造物担当))



図12 位置図

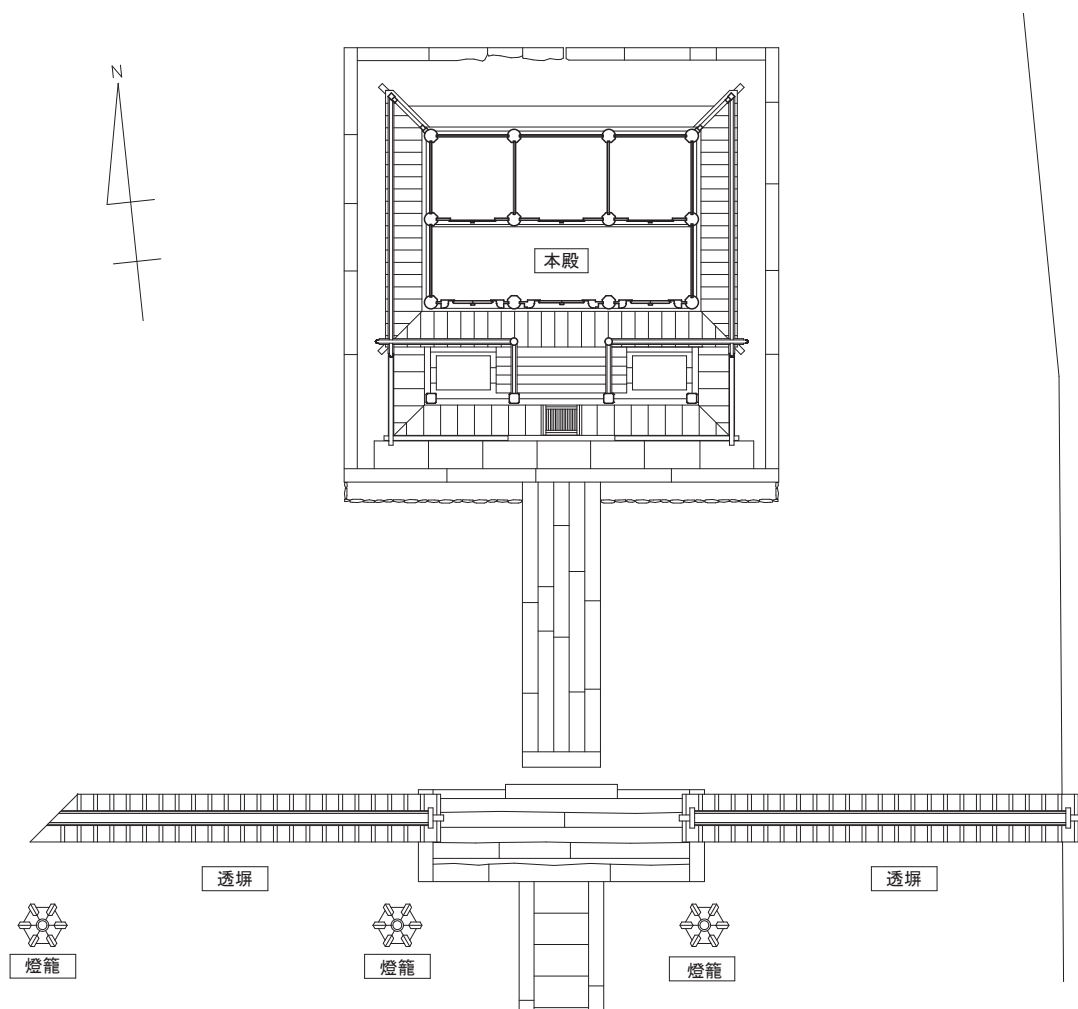


図13 配置図

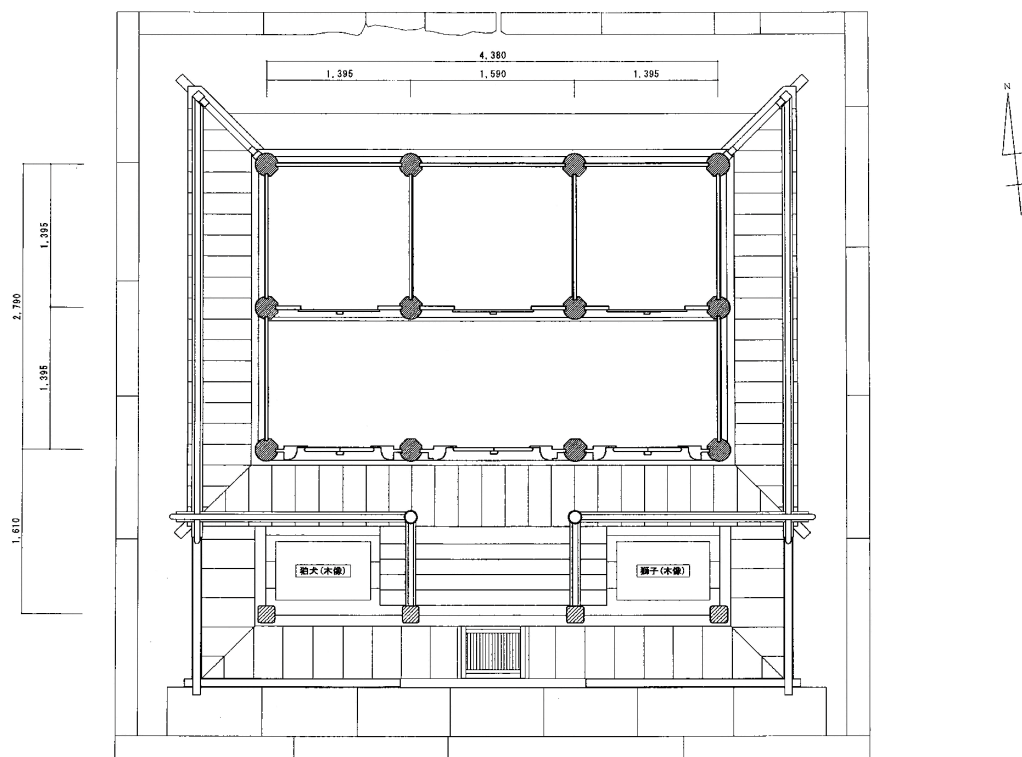


図14 本殿平面図

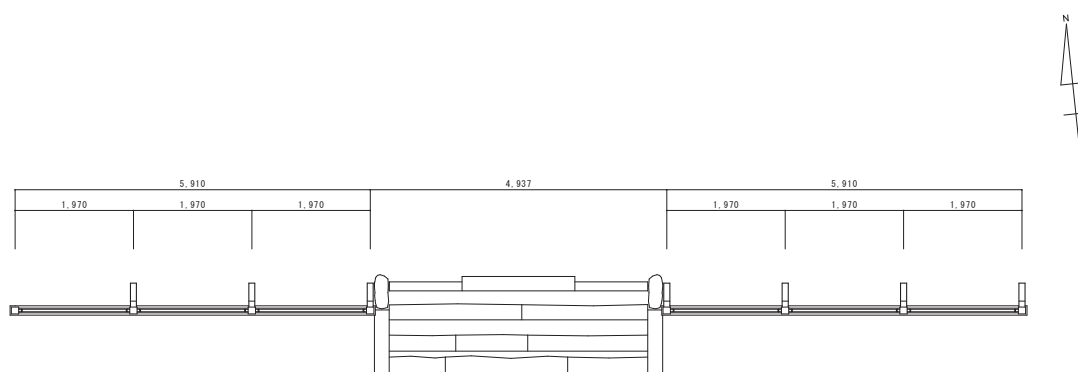


図15 透塀平面図

*図面は古材文化の会提供

棟札（昭和五十五年二月七日の記がある） 尖頭形，総高七六〇mm，肩高七三〇mm，上幅一九〇mm，下幅一六五mm，厚不詳，ヒノキ板目，台鮑力，釘穴無，内陣保管。



本殿内陣内厨子 扉裏墨書

右線箇所は紙貼りの上に記載されていた。

内陣 東

「此勝馬宮之神靈文政二年秋八月十日之夜宮殿

罹烏有之災幸而自火中取出了雖及少燒損

本是真之御靈也今度宮殿造営功畢 故

密二奉安置者也矣

文政四年夏六月朔日 醍醐座宮殿燒失不詳

〔祠掌 岩淵重道〕

内陣 中央

「此天満天神之神靈 文政二年秋八月十日之夜宮殿

罹烏有之災幸而自火中取出了雖及少燒損

本是真之御靈也今度宮殿造営功畢故

密二奉安置者也矣

文政四年夏六月朔日 醍醐宮殿燒失不詳

〔祠掌 岩淵重道〕

内陣 西

「当社清瀧宮 文政二年季秋八月十日

之夜宮殿罹羅馬之變神軀燒失了依之

先年當社修造遷座之刻拜見之

又以古記師傳等今度新令寫密二奉

御靈者也矣

文政四年夏六月朔 醍醐座宮殿燒失不詳

〔祠掌 岩淵重道〕

（表）

銅板工事 宮川弥一
本社殿 大工 奥谷工務店
屋根葺替 棟木取替 左官 岩淵茂夫
竣工 奥田治二

（裏）

昭和五十五年二月七日
宮司 大塚宣若 会計 岩淵良三
奉賛会 庶務 高田源太郎
会長 木下利幸 田内鉄三郎
副会長 中野清太郎 会計 中村泰三
木村貞夫 監査 畑山良雄

棟札（明治十一寅年五月二十九日の記がある） 尖頭形，総高六四五mm，肩高六二五mm，上幅一四〇mm，下幅一二五mm，厚不詳，ヒノキ板目，台鉋力，釘穴無，内陣保管。



（表）

手置帆屋命
天神地祇天太玉命齋部十八神
彦狭知命

（裏）

明治十一寅年五月二十九日
長尾天満宮神社上棟

棟札（明治廿八年十月吉日の記がある） 尖頭形，総高三八〇mm，肩高三六五mm，上幅二二五mm，下幅一九〇mm，厚不詳，ヒノキ板目，台鉋力，釘穴無，内陣保管。



（表）

明治廿八年十月吉日
長尾天満宮様
流屋根替替
榎皮師
渡邊三郎兵衛
太田吉兵衛
谷 榎治郎
芝田文太郎
渡邊益治郎

（裏）

三

棟札（文政三^{庚辰}歳九月五日の記がある） 尖頭形，総高七〇〇mm，肩高六八五mm，上幅一七〇mm，下幅一五五mm，厚不詳，ヒノキ板目，台鉋力，釘穴無，内陣保管。



（表）

（梵字） 奉造營天満大自在天神并 勝馬清瀧三所大明神寶殿
神威倍増 聖朝安穩 天長地久 座上上綱 福徳増長
寺家安寧 人法欽昌 國土豊饒諸民快樂 祈攸也

（裏）

（梵字） 文政三^{庚辰}歳九月五日^{寅戌}午成 新初 遷座師年預 大工棟梁同所泉町 平松源兵衛資富
同四年三月四日^{巳卯}立 密嚴院大僧都演乘 同定次郎蕃昌
同六月朔日^{庚辰}開 鬼宿 下遷座 岩淵右兵衛菅原康長
同七月丙戌定 角宿 上遷座 田中惣兵衛

棟札（明治十一年寅四月二十八日の記がある） 尖頭形，総高六四五mm，肩高六三〇mm，上幅一四〇mm，下幅一二五mm，厚不詳，ヒノキ板目，台鉋力，釘穴無，内陣保管。



（表）

勝馬大明神 詞掌
奉長尾天満大神 岩淵壽重
清瀧神社 同
同 内海忠兵衛

（裏）

（裏） 醍醐村惣産子中 御陵町組頭 仁兵衛
開出町同 赤間町同 勘七
大谷町同 新町同 良吉
開出町同 親弘
落東町同 柳塘
落西町同 落右衛門
同 権左衛門

棟札（文政四^辛巳年五月四日の記がある） 尖頭形，総高七〇〇mm，肩高六八五mm，上幅一七〇mm，下幅一五五mm，厚不詳，ヒノキ板目，台鉋力，釘穴無，内陣保管。



（表）

× 手置帆負命
 一 天神地祇天太玉命齋部十八神
 ☆ 彦狭知命

（裏）

文政四^辛巳年五月四日
 長尾天満宮御社上棟

棟札（文政四^辛巳歲五月四日の記がある） 尖頭形，総高九二〇mm，肩高九〇〇mm，上幅二三五mm，下幅二〇〇mm，厚不詳，ヒノキ板目，台鉋力，釘穴無，内陣保管。



（表）

勝馬大明神

平井治部卿法橋宣重
 大溪刑部卿法橋蒙正
 山田正六位下駿河守源爲美

奉造營天満大自在威徳天神新宮今日上棟天下泰平國土安穩當御門室御静謐 五穀豊穰除病延命 祈攸也

清瀧大権現

御造宮御用掛 櫻井雅榮櫻井忠貞
 御代官 山田内記源爲貴

（裏）

大年寄	兼下村良輔貞亮	御陵町	年寄	惣助
納庄屋	同	庄兵衛	年寄	庄右衛門
文政四 ^辛 巳歲五月四日	醍醐村惣彦子中	赤間町	年寄	落西町
大年寄	金井吉兵衛房常	新町	年寄	落保町
		大谷町	年寄	泉町
		小坂町	年寄	源左衛門
		開出町	年寄	南里町
			年寄	平兵衛
			年寄	八右衛門
			年寄	彦左衛門
			年寄	五兵衛
			年寄	菩提町

